

[特別活動]

子供たちと共に創る自治的学級 －自治的集団を育むサイクル－

高橋 健一*

1 主題設定の理由

河村（2012）は学級集団の発達過程を、混沌・緊張期、小集団成立期、中集団成立期、全体集団成立期、自治的集団成立期の5段階としている。また、全体集団成立期以上の状態の学級の比率が半分を割っていること、1年間たっても小集団成立期の状態の学級が2、3割はあること、崩壊した集団や荒始めの集団など教育的な環境とは言えないような学級が1割はあることを指摘しており、全国の学級集団づくりは不調だと述べている。

昨年度の3月に、私は3年間持ち上りの子供たちと卒業を迎えた。その子供たちも下学年で荒れを経験していた。私が担任した4年生初期には、まだその名残が強く現れていた。日常的にトラブルが起こる中で、一刻も早く担任との信頼関係を結ぶ必要性があった。学級崩壊をさせないために教師主導の授業や生活が続き、いつの間にか管理的な学級経営を行い、担任ありきの安定した学級に留まっていた。持ち上りの5年生では、その反動から放任的な学級経営となり、子供たちの活動を明確な手立てのないまま傍観するだけで、自治的能力を高める機会を逸し続けてきた。

上記の経験から、私は子供たちと共に創る自治的学級を学級づくりのゴールと捉え、必要な手立てとは何かを考えるに至った。子供たちの自治的能力を育成するには、特別活動が大きな役割を担っている。幸運にも持ち上りの6年生と一緒に「自分たちで課題に気づき、自分たちで課題を解決する」学級を目指す中で、成長の省察→課題の発見→取組の選択→取組の実践のサイクルを構築する必要性を感じた。

本研究では、特別活動の「なすことによって学ぶ」を方法原理として手立てを講じ、自治的学級を求めていく。

2 研究の目的

特別活動という集団とは、共通の目標を目指して協力して実践していく集団である。子供たちが、学級や学校生活の充実・向上を目指して、自分たちで諸問題の解決に向けて具体的な活動を実践することが、自治的能力を高める筋道となる。そこで、図1のような自治的集団を育むサイクルを考案した。学級目標を中心に据え、成長の省察→課題の発見は自問の充実により機能し、取組の選択→取組の実践は自問とつながる話合いの充実により機能すると想定した。

本研究では、導入期、成長期、成熟期で現れた子供たちの姿を象徴する事象を分析することで、自問と話合いの充実を図ることが、自治的集団を育むサイクル（成長の省察→課題の発見→取組の選択→取組の実践）を機能させ、子供たちと共に創る自治的学級に近付くことに有効であるかを検証することを目的とする。

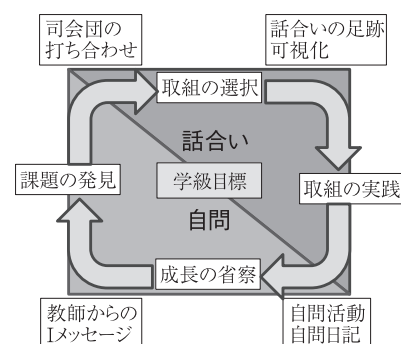


図1 自治的集団を育むサイクル

3 児童の実態と主題への迫り方

本研究の対象は、男子11名、女子14名、計25名の6年生である。

(1) 自問について

4月に学級の自慢を考えたとき、「あいさつ・返事」、「給食準備」、「残食0」、「学び合い」、「長縄」、「いいところ探し」など、子供たちが学校生活のことを自慢に挙げた。ただ、「清掃」を誰も挙げなかった。当校では、週3回、15分間の清掃に取り組んでいる。そこに自問を取り入れることで、定期的に継続した自問の機会になると考えた。

自問を清掃の中で行う際、平田（2005）が提唱する自問清掃を手本として実践した。信州の自問教育に源流があり、自主・自律・思いやりを育てる目的で行われてきたものである。

* 妙高市立妙高高原北小学校

- がまん清掃… 何分くらい黙って（友達と離れて一人で）掃除に取り組むことができるか挑戦する掃除
 ○親切清掃… 友達のよいところを見つけたり、お互いに気働きをして助け合ったりしながらする掃除
 ○見つけ清掃… 人が見つけられないような仕事を見つけたり、人が考えられない方法で掃除したり、大体きれいになったと思う状態から、さらに時間いっぱい仕事を見つけとおすことができるような掃除
- ※人間の心の中には、神様からもらった3つ（我慢、親切、発見）の玉がある。その玉は、日頃から磨いておかないと曇ってしまう。
 ※自問清掃のもとでは、教師もまた一人の掃除者であり、命令しないし、指示もしない。また、褒めない、叱らない、比べない。
 「褒めようとしなくて、感動を伝えよう。」「叱らないけれど、決して譲らない。」「比べないけれど、学び合おう。」という構えで臨む。

自問に取り組むことにより、自分や友達のよさや課題に気付くようになることをねらう。異学年交流の清掃では、様々な葛藤が起こり、自分や友達への気付きが生まれる。それを日記に記すことで、成長の省察と課題の発見の機会としたい。自問清掃を継続することで、自問の範囲は清掃に留まらず学校生活まで広がっていくであろう。

(2) 自問とつながる話し合いについて

自問により、自分たちで気付いた課題を話し合う。その課題は、自分事として捉えやすく、共有化しやすい。また、意見や理由を考える意欲にもつながり、本音を伝え合う話し合いが展開されるようになるであろう。

話し合いの事前

- 児童から寄せられた議題を司会団が学級の課題と照らし合わせて選択し、終学活で学級全体に共有する。
- 一人一人の考えを明確にして臨むために、自問日記に記述する。

話し合いの流れをマニュアル化

- 男女交互の円で座る→議題提案者から提案理由を発表する→目標（明日からどう在りたいか）を確認する→目標を達成するための具体的な方法を発表する→方法に対する質問を発表する→方法に対する賛成意見・反対意見の発表する→選択・決定（満場一致、多数決もO.K.）をする→ノート書記から振り返りを発表する

話し合いの事後

- 話し合いの足跡（議題と解決策）を学級の壁に掲示して可視化する。
- 話し合いで決めたことを学校生活で実践できたかどうかを振り返り、自問日記に記述する。（教師はIメッセージでコメントする。）

自問とつながる話し合いを通して、学校生活で学級の課題を解決できるようになることをねらう。より切実な議題を扱うために、つながりのある話し合いが必要不可欠である。そこで、週1回のペースで話し合いに取り組む。また、司会、黒板・ノート書記は、学期の間は固定で行う。できる限り、子供たち主体で話し合いが進むように働き掛けていく。

4 取組の実践

(1) 導入期の子供たちの姿（1学期）

① 自治的集団に近付くための目標設定

自治的集団に近付くためには、取組の実践や成果の省察の際に拠り所となる目標が必須である。前年度、自治的集団になろうとチャレンジを積み重ねてきた子供たちは、今までの自分たちを振り返り、4月の下旬に4回の話し合いを経て、図2の「ハッピーで、誰とでも協力できて、自分から進んで行動する、下級生のあこがれのクラス」を学級目標とした。

様々な価値観を交流する中で、自治的集団に近付こうとする方向性を確認しながら話し合い、学級目標を決めていた。例えば、「手本」と「あこがれ」のどちらを前面に掲げるかの話し合いでは、「下級生の手本なら5年生でもなれると思う。でも、下級生のあこがれとしての存在は、最上級生である6年生にしかねないと思う。」という意見が発表され、仲間の納得を得ていた。



図2 自治的集団に近付くための学級目標

② 心の玉磨きと学級目標の関連付け

自問清掃を子供たちに紹介する際に、道徳の授業で自問清掃を実践する長野県の中学校の映像を見せた。また、心の中心にある3つの玉磨きと学級目標の関連について示した。

- がまん玉を磨く。… 黙って見守り、お互いの成長を願う。 → 「ハッピーで」
- 親切玉を磨く。… お互いのよさに気付き、気働きして助け合う。 → 「誰とでも協力できて」
- 見つけ玉を磨く。… 自分から工夫して、時間いっぱい成長する。 → 「自分から進んで行動する」

映像には、黙々と自問清掃に取り組む中学生の姿があった。それは、教師ばかりではなく、子供たちにとっても衝撃的であったようである。この授業の感想で、A児は次のように書いている。

バパッとできているし、心がつながってるみたいに清掃していて、物音くらいしなくて、しゃべり声が出てないし、細かい場所まで見てるし、友達と協力していて、自問清掃って、とっても素晴らしいことですね。やることが一つ増えると、とっても大変です。でもその分、成長できると思います。今まで行ったことのない場所にたどり着けるとと思います。だから、磨いていこう。がんばろう。

子供たちが自問清掃をどのように行っていくかを考える機会であり、また、心の中の玉を磨くことが自治的集団に近付くことにつながると気付く機会となった。

③ 自学級のための自問清掃から

取り組み始めが5月中旬だったことから、全校実施ではなく、自学級のための取組からスタートした。自問清掃を理解しているのは6年生だけという状況の中でも、子供たちは意欲的に取り組み、自分への気づきを自問日記に書き記してきた。始めてから1週間ほど経ち、B児は次のように書いている。

私は正直言って、がまん清掃が苦手です。なので、いつも友達としゃべってしまい、自分でも納得いきません。でも、今日は、みんなに「今日はしゃべらないで掃除に取り組もう。」と言ったら、みんな静かにやっていたし、自分もだまって掃除に取り組めたのでよかったです。

我慢したいのにできない自分に気づき、葛藤している。また、2ヶ月ほど経ち、B児は次のように書いている。

今日は、班の人みんな、人のいいところを言い合ったりして、親切清掃をがんばりました。私は、2年生のMさんがみんなのいいところをたくさん言っていて、とてもいいと思いました。私もこれから人のいいところをたくさん見つけたいです。でも、なかなかがまん清掃をやっている機会がないので、もう少ししたら始まる期末清掃で、楽しくがまん清掃をしたいです。例えば、ゲーム方式にして、一番最初に清掃に関係ない話をした人が負けなどです。もっと楽しい方法を考えて、低学年も楽しくやれるものを実践していきたいです。がんばります。

B児は、下級生を巻き込みながら親切清掃をすることに成功している。下級生の成長に刺激を受け、自分自身も成長しようとしている。B児の課題であるがまん清掃については、この班の課題ともなっており、指示命令して取り組もうとするのではなく、楽しい方法を考え工夫して取り組もうとしている。

④ なすことによって学ぶ機会とつながる話合いで

話合いは、図3のようなスタイルで行ってきた。話題の中心から全員が等距離に座っていることで、一人一人の意見が平等で大切であるという意味合いがある。あいさつの向上、言葉遣いの改善、修学旅行先で歌の決定など、15回の話合いに取り組んだ1学期の最後に、「学校で肝試しをしよう。」と題して、学級イベントの話合いを行った。校長や保護者の承諾を得るため、目的を真剣に話し合う子供たちの姿が見られた。事前準備は、夏休みの課外活動の後に、特別な事情がない限り全員が自主的に居残って行っていた。当日は、保護者も参加し、小学校生活最後の夏休みに最高の思い出を創ることができた。もちろん、翌日の課外の前に早めに登校して、後片付けも自主的に行っていた。肝試しの実行委員であったC児は、1学期の話合いを振り返り、次のように書いている。



図3 男女交互の円で話し合うスタイル

私は、夏休みの肝試しで、自分たちだけで計画して、話合いで決まったことだから、Hさん（実行委員）と協力して、みんなで楽しんで絆を深めてできたのでよかったです。修学旅行の歌も、自分たちで決めて、喜ばせられてうれしかったです。

自分たちという言葉には、教師なしでも（見守っているだけでも）、自分たちだけで取組を選択して、取組を実践できたという達成感が感じられる。しかし、修学旅行での歌や夏休みの肝試しを実践する類のことは上手くできていたが、学級の課題を解決する類のことは、話合いで取組の選択まではするが、取組の実践に至らないということが多かった。取組の選択から取組の実践につながらないことを指摘するD児の振り返りである。

話合いをして学校生活で自分は、5年生のときと比べて、とても成長したと思います。いろんなことをクラスで話し合っで決めることもできました。せっかく話合いで決まったことを、学校生活で生かされることが少ないので、もう少し意識したほうがいいと思います。

話合いの足跡（課題と解決策）を教室に掲示して可視化し、取組の選択から取組の実践をつなぐとともに、自問日記での教師とのやりとりを学級便りに掲載するなどし、成長の省察から課題の発見をつなぐ必要があると感じた。

(2) 成長期の子供たちの姿（2学期）

① 全校実施になった自問清掃から

6月に職員研修を行い、職員全体の理解を得ることができたので、2学期から自問清掃は全校実施となった。縦割り班で自問清掃に取り組むことを通して、自分自身や下級生への気づきを書いたD児の自問日記である。

私は、掃除で机を運ぶのが面倒くさいと思いました。だけど、自分以外の下級生が一生懸命にやっているのを見て、「ああ自分もやらなきゃ。下級生の手本になりたい。」と思いました。そういうことは、今まで手本になっていなかったんだなあと、自分の本当を見つけることができました。班のみんな、見つけ玉をありがとう！

今日の自問は、掃除のときです。廊下の人に「隅っこを意識してゴミを取ってね。」と言っているけど、いつも取っていませんでした。今日も取っていませんでしたので、カチン！と頭にきて、「自分でやった方が早いよ。」とやってしまいました。これって、自分のためになるのか。廊下の人にやってもらった方がよかったのか疑問です。

下級生の言動に葛藤したり、下級生の成長に気付いたりすることは、相手意識をもち省察する機会につながる。全校実施のよさとして、最高学年が下級生から学び、自分の課題を発見する機会になることが挙げられる。目に見えるものだけでなく、心の中のことを自問することで、気付きの深まりが見られた。

② 清掃での自問から学校生活での自問への広がり

省察の範囲を清掃に留めることなく、学校生活に広げていきたいと考えていた私は、自問日記のお題の提示の仕方「今日の自問清掃で感じたこと」→「今日の自問（心の中のこと）」→「今日の自問について」へと変えていった。学校生活に留まらず学校外で省察しているE児の自問日記である。

今日、算数のとき、見つけ玉をみがきました。見つけ玉をみがいていて周りをよく見ると、仲の良い人と一緒にいたり、一人にいればいたりして、もう一人は誰もいないということがあったり、ほくは、「全員達成できるからいいや…」と思う気持ちが強いのと思いました。最後のテストで、いい結果が出るように周りを見る必要があると思いました。

今日は、バスの中のことです。一人のおじさんが乗ってきて、座る場所がなくて立っていました。そこで何度も「代わってあげないと…」と思いました。けれど、実行しようと思ったけど、できませんでした。自分の心の弱さ、実行できない自分を見つけました。

清掃での自問が学校生活での自問へ、さらに学校外での自問へと気付きの広がりが見られた。自分自身を省察して、課題を発見することが、いよいよ学校生活でも充実してきている。

③ 学校生活での課題の発見から生まれた話合いで

「学び合い」の向上、悪口・ひそひそ話の撲滅、朝運動の充実など15回の話合いを重ねた2学期、学級の方向性を決める「一人ぼっちをなくす方法」の話合いが行われた。きっかけは、複数の子供たちから「休み時間に一人ぼっちの人がいる。」という学校生活での課題が挙げられたことである。それを司会団の打ち合わせにより、一番に話し合う必要のある学級の課題として判断したのだ。この課題が共有化されるのを、私は心待ちにしていた。今までは、休み時間に一人にいるF児に、担任の私が話し掛けるなど気を配ってきていた。学級の仲間たちは、意地悪をしていると言うわけではなく、当事者意識が足りない者が多かったのである。「自分から話しかけることができない。」と泣きながら訴えるF児を、休み時間に一人ぼっちにしない方法を本気で話し合った。「サークルを立ち上げる。」や「いつもとちがう人と遊ぶ。」など意見が出された。最終的には、「声を掛ける（勇気づける言葉を言う）。」に決まった。その後、休み時間に、友達と一緒にバスケットボールをするF児の姿が見られ、一人ぼっちでいることは、ほとんどなくなった。それだけ、意味のある話合いであった。取組の実践が上手くいき始めたことを実感しているE児の振り返りである。

話合いを通して、みんながやろう、しようということが多くなってきている気がしました。一人ぼっちをなくすために、いろいろな人が声を掛けていたので、解決策に積極的に取り組もうという姿勢が、とてもよくなっていると思いました。

2学期は、自問の範囲が広がり、自問日記での教師とのやりとりも深まっていく中で、学校生活での成長の省察から課題の発見がつながり始めた。話合いでの課題に対する当事者意識が高まり、本音で意見を交流することができるようになってきた。解決策の必要感が強く実感する者が増え、取組の選択と取組の実践が上手くつながり始めた。

(3) 成熟期の子供たちの姿（3学期）

① 感謝の心と正直な心に気付く自問へ

2学期の後半、子供たちの自問日記に「ありがとう。」という友達や下級生への感謝の言葉が見られるようになった。平田（2005）が提唱する自問清掃には、心の中の3つの玉磨きに加えて、2つの心に気付く段階がある。

○感謝清掃…感謝の気持ちをもちながら掃除する。 … 机、教室、校舎などへの感謝の気持ちをもって働く段階
○正直清掃…自分の基準で判断して、掃除する。 … 他人の目を気にせず、自らの尺度に従って働く段階
※なにか都合がある場合は、掃除をしなくてもよい。ただし、その際も掃除が終わるまではそばにいて黙って掃除を見ている。

卒業を控えた子供たちに2つの心に気付く段階を紹介した。自分の心と向き合い、より深く、より広く省察する機会となった。最後の清掃で自分の心を素直に表現するD児の自問日記である。

今日の自問について、私は、最後の自問清掃で、最高の自問ができてよかったと思います。そして、心の中の3つの玉と2つの心に付け加えて、今まで支えてくれた下級生や先生たちに感謝できるように、小さな声で「ありがとう。」と言いました。(がまん玉がみがけなかったけど)最後まで感謝できてよかったです。

この頃には、自問は生活の一部となっていた。卒業式の練習で、仲間の成長を実感しているE児の自問日記である。

ぼくは、卒業式の歌を歌っていて、前はだめや少しよくなったで、完璧にはなっていないと正直思っていました。けれど、音楽のとき歌ってパートにわかれて練習してもどって歌うと、とりはだがつきました。W先生が言っていたとりはだがわかった気がしました。そして、成長したみんなのことを思って歌うと、涙が出そうでした。あと2日だけれど、卒業式も最高の歌にしたいです。

今まで一緒に過ごしてきた友達、下級生、先生方など、様々なことやものに心から感謝できるようになっている。お互いのよさや課題に気づき、それを全て含めて認め合い、学び合い、感謝し合う関係性になった。

② 自治的集団における関係性を求めた話合いで

自問清掃の充実、感謝の会のもち方など、10回の話合いを行った3学期には、子供たちが自治的集団に近付いているのかどうかを確かめるべく、仲島(2006)の追実践である卒業試験を行った。「このクラス25人で、いい人順に並べ。」というお題を出し、今までの価値観とは真逆の指導で子供たちを揺さぶった。子供たちは怪訝そうな顔で戸惑っていたが、「並んだら教えてほしい。説明も頼む。」と言い残して、教室を後にした。30分ほどして、職員室へ日直のF児が呼びに来た。教室では、子供たちが図4のような円で並んで待っていた。説明を求めると、I児が、「横一列にする案と円にする案が出て、その2つで話し合いました。でも、人にはよいところも悪いところも両方あるから、男女交互の円で並んで内側を向き、絆を表しました。」と、自分たちの結論を真剣な表情で伝えてくれた。



図4 絆を表す子供たちの結論

しかし、それだけではなく、私の予想を超える話合いがなされていた。卒業試験を振り返ったJ児の自問日記である。

卒業試験を終えて感じたことは、最初は、みんなが円という意見に賛成してくれなかったけれど、理由を説明したら、納得してくれてよかったです。「円の中に先生を入れるかどうか。」でも話し合いました。「先生は私たちの仲間だよ。」と言ったら、みんなが賛成してくれました。中学生になっても、このチームでがんばります。

子供たちは、担任である私も円に含めていたのである。4年生の頃ならば、円の中心にいる存在だったかもしれない。5年生の頃であれば、円の外にいる存在だったかもしれない。しかし、6年生の3月は、一緒に円を創る存在になったのである。ネームプレート25個ではなく、26個並べたことが何を意味するのか。それは、子供たちが担任である私を含めて、共に自治的学級を創るチームであったことを意味している。「このチームでがんばります。」という言葉の中には、自治的集団を育むサイクルが上手く機能しているからこそその自信がうかがえる。この出来事は、自治的集団を育むことにおける教師のリーダーシップスタイルを示唆するものでもある。

6 考察

(1) 研究の成果

学級生活意欲総合点の変化、自問と話合いのアンケート、卒業間際の子供たちの姿の3点から、自問と話合いの充実が、自治的集団を育むサイクルを機能させたかどうかを考察する。

① 学校生活意欲総合点の変化から

図5のQ-U調査の変化を比較分析すると、6年生(7月)の分布より、6年生(12月)に学校生活意欲が高まった児童が多いことが分かる。この変化から、2学期の終わりには、河村(2012)が示す理想の学級集団の必要条件であるルールとリレーション、十分条件であるチャレンジとシステムの要素がそろったと考えられる。必要条件で満たされるものが安心であり、十分条件で高められるものが意欲であると考え、安心を土台にして意欲が発揮されている状態と捉えられ、自治的集団を育むサイクルが機能してきたことを表していると言える。

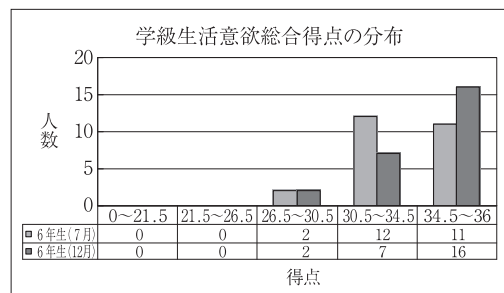


図5 学校生活意欲総合得点の分布

② 自問と話合いのアンケートから

表1のアンケート結果を比較検討すると、自問の充実を図ったことによって、子供たちが自分や友達のよさや課題に気づくようになったと感じていることが分かる。また、話合いの充実を図ったことによって、学校生活で学級の課題を

解決できるようになったと感じていることが分かる。自問を通した成長を実感しているB児の振り返りである。

私は自問に取り組んで、新しい自分を見つめ直すことができました。それは、清掃のときです。私は、最初の頃と比べて、意識なくとも、自然と友達の良いところを見つけることや、まだ掃除し足りないところを見つけることができるようになりました。また、班のみんなも2学期の終わりから3学期にかけて、課題だったしゃべらないでやるということができるようになっていました。一人一人が成長したんだと思いました。

表1 自問と話合いのアンケート（7月から3月 人数の推移）

自問清掃（活動）についてのアンケート（7月→3月）	まったく言えない	あまり言えない	ふつう	まあまあ言える	とても言える
Q2 自分や友達のよさや課題に気付くようになった。	0人→0人	0人→0人	3人→1人	7人→2人	15人→22人
話合い活動についてのアンケート（7月→3月）	まったく言えない	あまり言えない	ふつう	まあまあ言える	とても言える
Q6 学校生活で学級の課題を解決できるようになった。	0人→0人	2人→0人	1人→0人	4人→1人	18人→24人

B児は、1学期にがまん清掃を課題としていた。その課題を解決するために、継続して自問に取り組み、一人一人の成長を実感していることが分かる。自問の充実によって、自治的集団を育むサイクルにおける成長の省察→課題の発見が機能したと言える。

話合いを通した成長を書いたK児の振り返りである。

話合いの中では、45分いっぱい本音で話し合うことが増えてきました。意見の理由も、ただたくさん言うのではなく、考えた上でたくさんの意見が出せるようになりました。また、話し合い決めた方法をやろうとする姿も、とても増えてきたと思います。私も自分の意見をはっきりと言えるようになりました。

自分の意見を支える理由は、学校生活の中での気付きから生まれる。自問を通して、気付きの質が高まっているからこそ、自分の意見をはっきり言えるようになったのだと考える。また、自分たちで課題を発見することができるようになったことで、課題の共有化や話し合う必然性が生まれ、切実感をもって本音で話し合うことにつながったと考える。話合いの充実によって、自治的集団を育むサイクルにおける取組の選択→取組の実践が機能したと言える。

③ 卒業間際の子供たちの姿から

卒業を1週間後に控えたある日の昼休み、下級生のために「お化け屋敷」を行う姿が見られた。全校の7割の児童（約80名）が訪れ、大盛況となった。この企画は、「夏休みの肝試し」とセットで話し合われた内容であった。学級に掲示してある話合いの足跡を見ていたとき、「まだ、実践していないものがある。」というK児の発言から動き始めた。準備、運営、後片付けは、時間がない中で工夫して行っていた。最高学年として、下級生へ最高の置き土産となった。

この1年間を振り返っての作文の中に、D児が次のようなことを書いている。

（前略）…自問を通して、いろいろなものに感謝することができるようになり、正直な心で毎日、過ごすことができるようになりました。いつもと変わりなく過ごしているけど、自問を通して何かが変わりました。それは、自分の心の中です。（中略）…話合いを通して、みんなと積極的に相談して賛成や反対ができるようになりました。話合いで自分が困っていることが、解決できるようになりました。（中略）…あと、今の6年生のげんき学年が、先生がいなくても大丈夫な自治的学級になったと思います。

私は、子供たちと共に自治的学級を創ろうと思い、その手立てを模索してきた。管理や放任に陥ってしまったこともあったが、協同というリーダーシップスタイルが、「先生がいなくても大丈夫。」という言葉を生んだのだと考える。

以上の考察から、本研究では、自問と話合いの充実を図ることが、自治的集団を育むサイクル（成長の省察→課題の発見→取組の選択→取組の実践）を機能させ、子供たちと共に創る自治的学級に近づくことに有効であったと言える。

（2）研究の課題

本研究では、一定の成果が得られたと思うが、どこまで汎用性が認められるかが課題である。また、学校生活の中で自問の機会をどう見出していくのかは、目の前の子供たちの必要感に合致するか、職員集団の理解を得られるかなどをもとに慎重に検討する必要がある。また、自治的集団を育むサイクルを機能させるための取組について、より詳細に考察することが求められる。今後も、自治的集団を育む教師の働き掛けについて、研究を深めていきたい。

〈引用・参考文献〉

- 1) 河村茂雄 「学級集団づくりのゼロ段階〔Q-U式学級集団づくり入門〕 図書文化、2012年
- 2) 仲島正教 「教師力を磨く―若手教師が伸びる「10」のすすめ」 大修館書店、2006年
- 3) 平田 治 「子どもが輝く「魔法の掃除」のヒミツ」 三五館、2005年
- 4) 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 特別活動編」 東洋館出版社、2008年